農業がおもしろくなる私の情報活用 8

「ルーラル電子図書館」の農家の工夫を進化させる

富山県黒部市 大規模受託農家・池田純一さん

編集部

池田純一さん（56歳）。全面受託でイネ17ha、ダイズ10haを経営（自作地は2.5ha）。イネはコシヒカリのほか、富山BLコシヒカリによる減農薬栽培。ひとめぼれ、ミルキークィーンなど。コシヒカリの直播栽培1.2ha

あの時はきつかったなあ、と農作業をふり返りながら、今年の栽培を考え、機械の改造に打ち込む。池田純一さんの冬は、「工房」と呼ぶ機械倉庫にこもって機械いじりにいそしむ楽しい季節だ。そんな池田さんの冬が、「ルーラル電子図書館」のおかげで、ますます充実した時間になってきた。

「作戦室」のルーラル電子図書館 一カ月で一〇〇〇ページ

全面受託を中心に、イネ一七ha、ダイズ一〇haを夫婦二人でつくりこなす池田さん。一万箱を育てる育苗時期などに高校生にアルバイトを頼んだりするが、夫婦二人でやれる農業をめざして、栽培法や機械の工夫を積み重ねてきた。

「人がつくった機械をそのまま使っているだけではつまらない」と池田さん。これまでも、コンクリート畦畔でロータリが入らないアゼ際をトラクタに乗ったままディスクで耕せるようにしたり、ダイズの培土機の幅を作業しながら変えられるようにしたり、培土しながら除草剤を散布できる工夫など、ヒット作品を生み出してきた。若いころ、鉄工所勤めで身につけた技術のおかげだ。農機の展示会に出かけようとすると、奥さんから「何も買ってこないでよ」と釘を刺されるほどの機械道楽だが、一方では、手元にある機械を大切に使い、長持ちさせるように手入れしてきた。

そんな池田さんが「ルーラル電子図書館」の年会員になったのは昨年十一月。お父さんの時代からの「現代農業」読者で、「ルーラル電子図書館」のことは誌面で知っており、気になっていた。そんな時、「無料体験」の募集があり、早速応募。使ってみると見たい記事がたくさ

んあり、すぐに規定の一〇〇ページを超えてしまい、それならと年会員になったのである。

会員になった当初は朝晩、ほとんど毎日のようにパソコンに向かった。見た記事は一カ月間で一〇九六ページ。「農業技術大系」と「現代農業」が大半で、主に、ダイズ、イネ、葉面散布、そして農業機械に関する記事をみた。

「技術大系」は目次から、「現代農業」はテーマガイドやキーワード検索でみることが多い。そして必要な記事はどんどんプリントしておく。

パソコンのある部屋を、池田さんは「作戦室」と呼んでいる。パソコン歴一〇年、簿記のために購入し、その後、インターネットでの情報収集も行なってきたが、ルーラル会員になって、いよいよ「作戦室」らしくなってきたという。「ルーラル電子図書館」に大変なほれ込みようで、受託農家仲間の勉強会では、自分で資料を用意して、電子図書館の魅力をアピールした。

「ルーラル」をヒントに生まれた今年の作戦

「ルーラル電子図書館」をヒントに、池田さんが、今年、やってみようと思っている「作戦」がすでにいくつか生まれている。

▼モミガラによる汚粒除去を大量に

ヒントになったのは二〇〇二年十一月号の「モミガラ使って簡単汚粒処理」。宮城県の佐々木一郎さんの記事で、混合機にダイズとモミガラを入れて一〇～一五分回転させ、最後に唐箕で風選してモミガラを飛ばすというやり方だ。早速仲間と一緒に実験、処理したダイズとしないダイズを検査官にみてもらったところ、等外ダイズが等級入りすることが確認できた。

ここからが始まり。池田さんはこれを大量にできる方法を考え、すでに青写真ができている。ダイズを循環式乾燥機にかける時、乾燥した時点でモミガラを入れて、排出しながらマメを洗う、という仕掛けだ。これを完成させるのが、この冬の機械いじりの最大の楽しみだ、という。

「農家の工夫にはヒントがつまっています。それを、自分の経営にあうように〝進化〟させる。自分で進化させようと思うと、『ルーラル電子図書館』は宝の山です」

そう話す池田さんは、「スクラップも夢ある機械に」（一九八七年十二月号）

池田さんが“工房”と呼ぶ機械倉庫の一角。ドリルや溶接機などいろんな工具がある

や「改造に役立つスクラップ部品集」（一九九一年十二月号）、「年をとっても農業を続けることができるよう工夫をした機具と設備」（一九九三年八月号）など、古い記事も含め、「現代農業」の機械関係の記事を楽しく読んでいる。

▼尿素と海のミネラルの葉面散布

ダイズへの海水と尿素の葉面散布も、今年、やってみたいことの一つ。

ダイズは三年おきのブロックローテーションだが、転作が始まって一五年。その土地で五作目、六作目となるダイズは生育がおもわしくない。昨年は台風・長雨で粒の肥大停止や腐敗粒が多発したが、普通の年でも一二〇～一五〇kgぐらいしかとれない。転作を始めた当初は三〇〇～四〇〇kgとれた。そのころとは、粒張りも粒のテリも全然ちがう。しわ粒も多くでる。有原丈二氏（独・農研機構作物研究所）の記事にあるように、明らかに地力の低下の影響だ。

しかし、堆肥を入れるには手間、金がかかりすぎる。それに、しわ粒や低収化にはホウ素などの微量要素不足も関係しているようだ。そこで「土壌施肥編」で微量要素の働きや施用法などについて調べた。問題はどんな方法で補給するかだが、微量要素肥料はけっこう高い。そこで注目したのが、最近本誌で追究している「海のミネラル力」。関連する記事を読んでいくと、単体の微量要素とは違った、総合的なパワーがあるようだ。幸い、海洋深層水が近くから安く入手できる。

池田さんの住むこの地は、北アルプスから流れでる黒部川の扇状地。山からの土と水によって田んぼにミネラルが豊富に供給されてきただろうが、長年の化学肥料による栽培やダイズ導入で、ミネラルが不足するようになってきた。そこで、海のミネラルを活かそうというのである。

そしてもう一つは尿素の葉面散布。「技術大系」にはアズキの記事だが、尿素の葉面散布は葉に害がでにくく吸収がいいことが書いてあるし、「現代農業」には開花期の尿素追肥の事例も載っている。葉面散布はブームスプレーヤを走らせればよく、土に施用するより簡単、省力的だ。簡単だが、やるからには、多目的な効果をねらいたい。こうして今年、尿素＋海洋深層水＋殺虫剤の葉面散布で、地力の低下をカバーし、なんとかダイズを盛り上げたいと池田さんは考えている。

イネの育苗ハウス。雑草防止に全面シートを敷いている。中央は苗箱を運ぶレール。手づくりの台車に200枚の苗箱を載せてラクラクと移動することができる

▼積み重ねの低温出芽で

イネでは、温湯処理に加え、今年は木酢液の種モミ処理も考えている。エコファーマーになっている池田さんは仲間とともに富山BLコシヒカリによる減農薬栽培にも取り組んでおり、温湯処理＋木酢液で減農薬をさらに進めたいという。

積み重ね育苗の低温管理というアイデアもある。「技術大系」でも「現代農業」でも、イネの出芽は低温がいいという指摘が目につくが、これを徹底し、四月中旬にハウス内で被覆なしで積み重ね、普通二〜三日で終わる出芽を一週間かける。低温だから種モミの養分の消耗も少なく、また高温出芽のように病気に悩まされることもないのでないか。そして、こんなねらいもある。

出芽に一週間かかるなら、日曜日に播種して、次の日曜日に箱を広げるというサイクルになる。これなら高校生のバイトや農協に勤める息子、友人・知人に手伝ってもらいやすい。大面積をやりくりする工夫だ。

▼鉄コーティングで田植え機利用の直播

イネの直播栽培でも新しい挑戦をする。直播栽培関連の記事もいろいろ調べ参考にした。「技術大系」の「作物編」には「田植機利用のマット式水稲湛水直播システム」が掲載されているが、池田さんたちがやろうとしているのは独自の方式。鉄コーティングした種子をモミガラマットに播種し、ふつうの田植え機で行なうやり方だ。

モミガラマットは粉砕したモミガラに肥料や接合剤を加え、加熱圧縮して厚さ一四㎜の帯状にしたもので、カントリーエレベーターから出る大量のモミガラを有効利用しようと、JAくろべが製造している。軽いし安いと好評だが、このマットにカルパー、さらに鉄コーティングした種モミを播種し、田植え機（爪を専用のものに交換）で、打ち込んでいく方法である（この鉄コーティングについては、今月号一一四ページでも紹介）。

現在、JAに直播用の機械が三台あり、リースによって直播栽培が五〇haにまで広がっているが、なにせリース料が高い。普通の田植え機が使えるなら、もっと直播に取り組みやすくなると、JAの直播栽培協議会の会長でもある池田さんはいう。

この直播、苗つくりが省けるだけでなく、出穂期が一週間遅れ、遅植えと同じ効果が得られるのも魅力だ。播種日を移植日と同じ四月末にすれば、移植のほうは七月末に出穂するが、直播では八月五、六日までずれ込み、高温障害を受けにくくなる。実際、直播のイネはシラタの発生が少ない。打ち込み点播・落水方式のコシヒカリの収量も平均五〇〇kgで安定している。

遅播きが進んでいるが、田植えは連休の前半に終わらせてしまいたいというのが、多くの農家の心情。この方式なら、兼業農家もやれるから、直播の面積は、まだまだ伸びるのではないかと、池田さんはみている。

◇

「『ルーラル電子図書館』は私の知恵袋です」と池田さん、〝進化〟はまだまだ続きそうだ。

『ルーラル電子図書館』無料体験受付中!!　一〇日間一〇〇ページまで体験できます。お申込みは、巻末のハガキで。